

Lin, A. C., 1998, "Bridging Positivist and Interpretivist Approaches to Qualitative Methods," *Policy Studies Journal*, 26(1): 162-180.

(A. C. リン, 1998, 「質的方法の実証主義アプローチと解釈主義アプローチを架橋する」)

導入 (pp.162-164)

- 政策研究は、質的研究と量的研究の両方を用いる長い伝統をもつが、質的研究を量的研究に対置させる通常の並列の仕方では、質的研究それ自体に多数の異なるアプローチが含まれるという事実を見逃しやすくなる。
 - 質的研究は実証主義¹ (positivist) でありうる：一連の結果を首尾一貫してもたらず習慣の記録や、政策問題と一般的に関連する特徴の同定、現場や行為者の違いを横断して継続するパターンの発見を試みる事が可能。
 - 質的研究は解釈主義 (interpretivist) でありうる：「貧困」といったおおまかな概念が具体的に用いられるなかでどのような意味をもつのかを理解することや、人びとがみずからの行動や信念に対しておこなう意識的／無意識的な説明を明るみに出すこと、特定の時間・文化・場所をとらえて再現することで人びとの行為を理解可能なものにする事を試みる事が可能。
- 実証主義と解釈主義の違いをわかりやすく示す研究事例：
 - Edin (1991)²：実証主義アプローチ。社会福祉の受給者 (welfare recipients) がみずからの基本的ニードを満たすためにおこなう活動を観察し、社会福祉の支給と生存にかかるコストとのギャップが他の場所でも同様にあると考えれば、他の受給者も自身の調査対象者と同じような対処を講じていると推定するのは合理的だと主張。議論の説得力は、発見したパターンの一般化可能性 (generalizability) に依存。
 - Stack (1974)³：解釈主義アプローチ。受給者による対処の1つである親族にもとづく援助のネットワークを記録し、そうしたネットワークが、たとえ非常に大きなコストをとともなうとしても、いかにして相互の義務感を強化するのかを説明する。議

¹ 訳語について。positivist という語は、通例「実証主義者」と訳すことが多いように思われるが、この論文の著者は、文脈からして何らかの人物を指していないと思われる場合でも positivist という語を用いている (たとえば, "Qualitative work can be positivist." という記述がある)。このような場合、positivist を「実証主義者」と訳すことはあまり適切でないと考え、本レジュメでは「実証主義」あるいは「実証主義の」といった訳語を用いている (何らかの人物を指していると思われる箇所については「実証主義者」と訳出した)。同様に、interpretivist という語についても、適宜「解釈主義」あるいは「解釈主義の」といった訳語を用いた。

² Edin, K., 1991, "Surviving the welfare system: How AFDC recipients make ends meet in Chicago," *Social Problems*, 38(4): 462-474.

³ Stack, C., 1974, *All our kin: Strategies for survival in a Black community*, New York, NY: Harper and Row.

論の説得力は、記述の正確さと、そこで記述されるコミュニティにおける振る舞いや信念をどれほどの範囲で説明するかに由来。

- このように、実証主義の質的研究と解釈主義の質的研究とのあいだの違いとは、データに対して向ける問いと、導こうとする結論のタイプの違いである。
 - 実証主義の研究は、選好や動機や行為に関する詳細を、他の事例で検証したり確認したりできる命題と結びつけようとする。これに対し、解釈主義の研究は、そうした詳細を、ある特定の事例で現れる信念の体系と結びつけようとする。
 - 実証主義の研究は、一般的なパターンを同定することで、一般的な原則（principles）や関係（relationships）に言及することができる。これに対し、解釈主義の研究は、一般的なパターンが実際に（in practice）どのように見えるのかを示すことでそれらに言及することができる。
- こうした違いは、両陣営の態度を厳格に貫こうとする純粋主義者（purists）をして、2つの推論のシステムが両立不可能なものであると主張させる。
 - たとえば、King ら（1994）⁴は、解釈主義の研究が正しい問いを提起することや、結論についての確信を強めることに役立つものの、科学的推論の方法のみが、仮説の評価やその真偽の確認を可能にすると述べる。他方、Lincoln と Guba（1995）⁵は、解釈主義的アプローチが新しいパラダイムであると主張する。
- しかし実際には、それぞれの推論の論理が異なり、また異なる問いに答えることに適しているがゆえに、2つのアプローチの論理を組み合わせた研究は有効なものとなる。
 - 実証主義の研究は、データの中に一定の確率で現れる因果関係（causal relationships）の存在を同定することができる反面、特定の因果関係が含意するメカニズムがどのように作動しているのかを説明できない。一方、解釈主義の研究は、具体的な事例における因果メカニズム（causal mechanisms）を詳細に検討し、特定の変数がどのように相互作用しているのかを説明できる反面、政策学者にとってとくに重要な関心事である、類似した事例がどれほどの広がりをもって存在しているのかという点を知ることができない。
 - メカニズムと関係をより明確化した結果として、実証主義と解釈主義の組み合わせは、それぞれのアプローチが別個に陥るバイアスを修正するのにも役立つ。実証主義の研究がメカニズムの作動に関する知識を欠く場合、そこで同定された因果関係

⁴ King, G., Keohane, R. and Verba, S., 1994, *Designing social inquiry: Scientific inference in qualitative research*, Princeton, NJ: Princeton University Press.

⁵ Lincoln, Y. and Guba, E., 1985, *Naturalistic inquiry*, Newbury Park, CA: Sage.

について何らかのストーリーを語る際に、手元の事例についての直観的にもっともらしい前提を安易に当てにしてしまう。一方、解釈主義の研究は、自身が扱う事例以外では適切でないような解決策を提示したり、あるいは因果メカニズムの複雑さを過剰に評価することで、ある問題のすべてのレイヤーに取り組みないような政策改革の可能性を強く否定したりするといった誤りに陥りうる。

- 以下では、近年の貧困研究からいくつかの例をとりあげつつ、因果関係が実証主義の研究の分野（province）である一方、因果メカニズムが解釈主義の研究の分野であること、またいずれか 1 つのアプローチを選び好みすることは誤りであり、両者を補完的なものとみなすべきであることなどを論じる。

関係とメカニズムについて（pp164-169）

- 因果関係とは、2 つの要因の系統的な結合のことであり、他の事柄が等しければ、一方は他方の結果として必然的に生じると主張される。
 - 例：職歴がある人はそうでない人よりも職を得やすい。
- 因果メカニズムとは、かつての職歴と現在の仕事に関係するのはなぜかを説明するもの。
 - 例：雇用主は特定の技能訓練を受けているサインとして職歴をみる／職歴は仕事の習慣をもつことを示す／雇用主の通俗的な知恵の一種として職歴を用いる／etc
- 因果関係と因果メカニズムが互いに独立して存在することはなく、因果性（causality）が存在するならば、そこには関係とメカニズムがともに含まれなければならない。
 - 政策形成の目的に照らせば、関係とメカニズムの両方を同定することの必要性はより切迫したものになる。というのも、因果関係の証明なしに、政策がどの要因に取り組みべきなのかを知ることはなく、またメカニズムの証明なしに、それら要因にいかにして取り組むべきかを理解することはない。
- 以下、職歴と現在の仕事の例から、関係とメカニズムの双方を見ることの重要性を示す。
 - 社会福祉の受給開始・廃止のパターンに関する近年の量的研究では、職歴の有無と雇用されうる能力（employability）との関係が示されているが、その結論に埋め込まれた物語には（上記の因果メカニズムの例で示したような）数多くの可能性がある。
 - それを特定するために、質的な方法を用いることが必要となる。実証主義の方法でデータを用いる場合、研究者はデータそれ自体を観察として扱い、情報のどの部分

が連関しているのかを考え、その連関の強さを評価する。たとえば、仕事探しについて受給者たちに尋ねたインタビューからは、職歴をもたない受給者は求人案内広告で仕事を探していたのに対し、職歴をもつ受給者はかつての同僚をつうじて職を得ていたという事実が明らかになるかもしれない。

- しかし、実証主義アプローチは、因果メカニズム、すなわち複数の現象のあいだの結びつきがなぜ存在するのかを説明しない。上記の例に立ち返れば、職歴の有無によって仕事探しの方法が異なることの背後には、友人に仕事探しの助けを求めることができることに職歴をもたない受給者は気づいていないという事情や、従業員のネットワークから求職者が紹介されなくなるまで雇用者が広告を出さないといった事情があるかもしれない。
 - この例が示すように、因果的に関係する諸変数を結びつけるメカニズムを説明することは、たんに因果的な物語（causal story）を豊かにするのみならず、それをつくり変えもする。もしも因果メカニズムが、たんに職歴のある受給者のほうがより多くの仕事へのアクセスを有しているということなのであれば、ネットワークのない受給者が労働契約を結ぶことを援助すれば政策課題は解決されうる。しかし、雇用者が従業員からの身元保証を欲しているということが問題なのであれば、雇用促進の取り組みにはほとんど効果がない。
 - このような因果メカニズムの違いを発見し描写することは、解釈主義アプローチに適している。たとえば、解釈主義の研究者は、雇用者が求職者の適性をどのように評価しているのかを直接尋ねたり、そうした適性への要求が何を反映しているのかを探ったりする。これらの詳細は、職歴と雇用とのもっともらしい結びつきを、首尾一貫した論理を備えた世界の中に埋め込む。その論理は、研究者のものとは一致しないかもしれないが、（調査対象となる）行為者の参照枠組みにおいて一貫性のあるものとなる。
 - この最後の点は、政策の研究・デザイン・評価にとってとりわけ重要である。というのも、政策研究者は解決策の発見に向かわなければならないが、原因と問題とのあいだに存在する関係を知ったとしても、その関係は操作しえないものであるかもしれない。それゆえ解決策を指し示すことにはならない。しかし、たとえば、社会福祉の受給者にとってネットワークがいかなる意味をもつのか、いかにして仕事の供給源として役立つのかを知ることができれば、その代わりとなる策（たとえば雇用者の信用を高めるなど）を提示することができる。
- このように、政策研究における実証主義と解釈主義の組み合わせは、因果的な「何が」（causal “what”）と「いかにして」（causal “how”）をともに提供する。それは、政策

研究者がある課題についての質的なデータを加えることだけでなく、その課題に対して新たな問いを向けることを可能にする。

- 2つのアプローチは補完的なものであるにもかかわらず、妥当性（validity）の理解をめぐる対立が両アプローチの支持者を隔てている。
 - 実証主義者は、一般化が因果的研究の目標であり基準であると信じる一方、解釈主義者は、信憑性（credibility）の観念と記述の正確さにもとづいて妥当性を認める。

妥当性を評価する（pp.169-174）

- 実証主義と解釈主義を真の意味で組み合わせるためには、それぞれのアプローチをもう一方のアプローチのバイアスを抑制するために用いることが求められる。それを達成するためには、実証主義と解釈主義の研究における妥当性を評価するために必要とされる基準について理解しなければならない。
- 質的方法を用いる実証主義者と解釈主義者はともに、妥当性の問題に取り組むための洗練された手法を発展させてきた。いずれのアプローチにもとづく質的研究者も、研究プロセスが明記された手順によって構成されていることや、いかにして調査地に入り、インフォーマントがだれで、人びとが研究者の存在にどのように反応したのかといった点に注意を払う。
- 他方、研究の中身をいかに評価するのかという点において、質的研究者たちの方法は分かれる。実証主義者は統計的な推論の論理を質的研究に適用する傾向にある一方、解釈主義者は調査地の「分厚い記述」に専念する。実証主義者にとって、実際の研究結果と対照させるべき基準とは「平均的な」結果であり⁶、解釈主義者にとっての基準とは、詳細の正確さと、記述の完結性（completeness）・特殊性（specificity）である⁷。
- 不確実性に対処する方法も、2つのアプローチのあいだでは異なっている。実証主義の場合、仮説から予測される重要な次元について、できるかぎり多くの観察を比較するというリサーチデザインをつうじて、不確実性は低減されうる。これに対し、解釈主義の研究における正確さは、研究の対象となっている状況に対する解釈の忠実さ（faithfulness）と、提示される記述の分厚さに依存する。解釈の忠実さは、同僚

⁶ 実際の研究例として、平均的な社会福祉受給者の姿を提供するような調査対象を得るためのサンプリング技術を説明することで、インタビューの妥当性を明示するという方法が紹介されている。

⁷ 調査者自身が調査地の人びとの生活にいかにか深く入り込み、いかなる理由でその調査地が重要であるのかを説明することで、研究の妥当性を示す例が挙げられている。

（peer）からの批判や、研究対象である集団成員からの反応，できるかぎり多くの種類の観察などと照らし合わせ確認することによって決定される⁸。

- 以上から，実証主義者と解釈主義者が用いる（妥当性の）基準とは，その良し悪しを比較できない性質のものであり，異なる理由で用いられる別種のものである。このような違いが，実証主義と解釈主義を組み合わせることに対する拒否の中核にある。しかし，こうした拒否によって，実証主義と解釈主義の組み合わせがそれぞれのアプローチに内在するバイアスを低減する可能性は閉ざされることになる。
- 研究が政策に利用される際，2つのアプローチの組み合わせは特に重要である。
 - 一般的な規則（general rules）や平均的事例に向けられる実証主義者の関心は，一組の因果関係を他から切り離して考えることができるのであるから，それらを分離して操作することも可能だ，という想定に至りやすい。しかし，そのような考えでつくられた政策は失敗しやすい。さらに，政策の対象となるコミュニティに対する共感を欠くことで，研究者は，ある問題を解決するためのあらゆる取り組みを良いものだと想定しがちである。しかし，当該コミュニティにとって，その問題の原因はほとんどつねに，他の重要な価値や習慣と関連している。したがって，実証主義者の解決策は，当該コミュニティにとって，問題の原因以上に悪いものとなりうる。
 - 具体的な事例に現れる一般的な原則（general principles）に向けられる解釈主義者の関心は，その事例が全体の縮図（microcosm）であるとの想定につながりやすい。そうした想定にもとづく政策はしばしば，その目標であるすべての対象に適合するほど一般的なものにならないことがある。また，解釈主義者は，特定の政策課題の根底に存在する，単一の介入では状況を改善できそうもないほど多数の絡み合う要因を明らかにすることで，停滞（paralysis）をもたらすことがある。
- 養育費支払いの強制をめぐる研究事例は，上記の点をより理解しやすくする。
 - 実証主義者の研究は，裁判所が父親に対して養育費の支払いを命じることができなかつたり，あるいは命じられた支払いがおこなわれなかつたりすることが，母子に深刻な経済的影響を与えていることを記録してきた。したがって研究者たちは，養育費の強制を強化することに歓迎する。
 - しかし，解釈主義者の研究は，このような養育費の強制が，低所得のアフリカ系アメリカ人にとって良くない結果をもたらすことを提言している。というのも，

⁸ 元論文の注 15 において，著者は，この箇所の議論が King ら（1994）の議論の類推であると述べてつづ，解釈の忠実さを確認する作業の目的は不確実性を測定することにあるのではなく，別の解釈の可能性を考慮することにあると述べている。

これらの研究によれば、インナーシティに暮らす未婚の父親たちは、粉ミルクやおむつの現物支給、子守りなどをつうじて、自分たちの子どもをひそかに援助している。同時に、彼らは慢性的な失業状態にあることから、上記のような貢献を福祉制度を介して公式におこなうことがかなわないことも示されている。

- 解釈主義の視点がなければ、上記のような事実とそこから得られる示唆は政策形成者に知られぬままとなり、裁判所による養育費支払いの強制に代わる政策を設計することは困難となる。しかしその一方で、代わりとなる政策がすべての父親にとって適したものであるなどと示唆することは、解釈主義の研究の不適切な一般化であり、そこでは実証主義の研究が有益な修正をもたらす。

会話する研究（Research in Conversation）（pp.174-177）

- 多様なアプローチを用いた完璧な研究を設計することはむずかしいが、このことによって、異なるアプローチを意識した研究をおこなう能力について研究者たちが目をつぶるようなことがあってはならない。
- 以下、2つの伝統のどちらか一方に主眼を置く場合でも、他方の伝統から洞察を得ることを可能にする4つの選択肢を提示する。
 - 1) 他の文献情報に基づく議論の展開：自身の問いと実質的に同じ焦点を持ちつつ、異なるアプローチを採用している文献を徹底的に調べる。その結果、研究者は、みずからの問いを再構築する方法や、新たな情報源を探し出す方法について議論しなければならなくなる。
 - 2) 補完的な研究の概説：異なるアプローチを採用した文献にもとづいて問いを構築するのではなく、むしろ自身の研究における発見が、異なるアプローチを用いた他の研究によっていかに豊かなものとなりうるのかを探る。
 - 3) 探索的な解釈主義研究（exploratory interpretivist study）：2つのタイプの研究を組み合わせる機会がもしあれば、研究者は探索的な解釈主義研究から始めるべきである。その理由は、解釈主義の研究が、実証主義の研究の基礎として使えるような仮説やメカニズムを示す力を持つからである。これに対し、実証主義の研究は、解釈主義者が重要だと考える文脈に関する情報を省くかもしれないが、少なくともそこで焦点化される因果関係については正確に特定される見込みがあり、結果的に文脈に関する情報は不要なものとして正当化されかねない。
 - 4) 比較事例研究（comparative case studies）：比較事例研究は、実証主義と解釈主義のもっとも良い特徴を同一の研究に組み込むことを可能にする。事例研究は、研究者が関心を向ける現象をその文脈のなかで理解することを可能にするが、1つの

研究プロジェクトに複数の事例を含めることで、研究者は、特定の関係をより厳密に定義することを求められると同時に、代替可能な説明のコレクションを得ることができ、用語の定義が状況に特化しすぎるあまり他の状況との関連性を失うといった事態を避けることができる。比較事例研究の大きな利点は、実証主義者と解釈主義者の双方の目的を両立させることができるような構造（structure）を提供する点にある。さらにいえば、そうした構造こそが、このような組み合わせを避けがたいものにするのである。